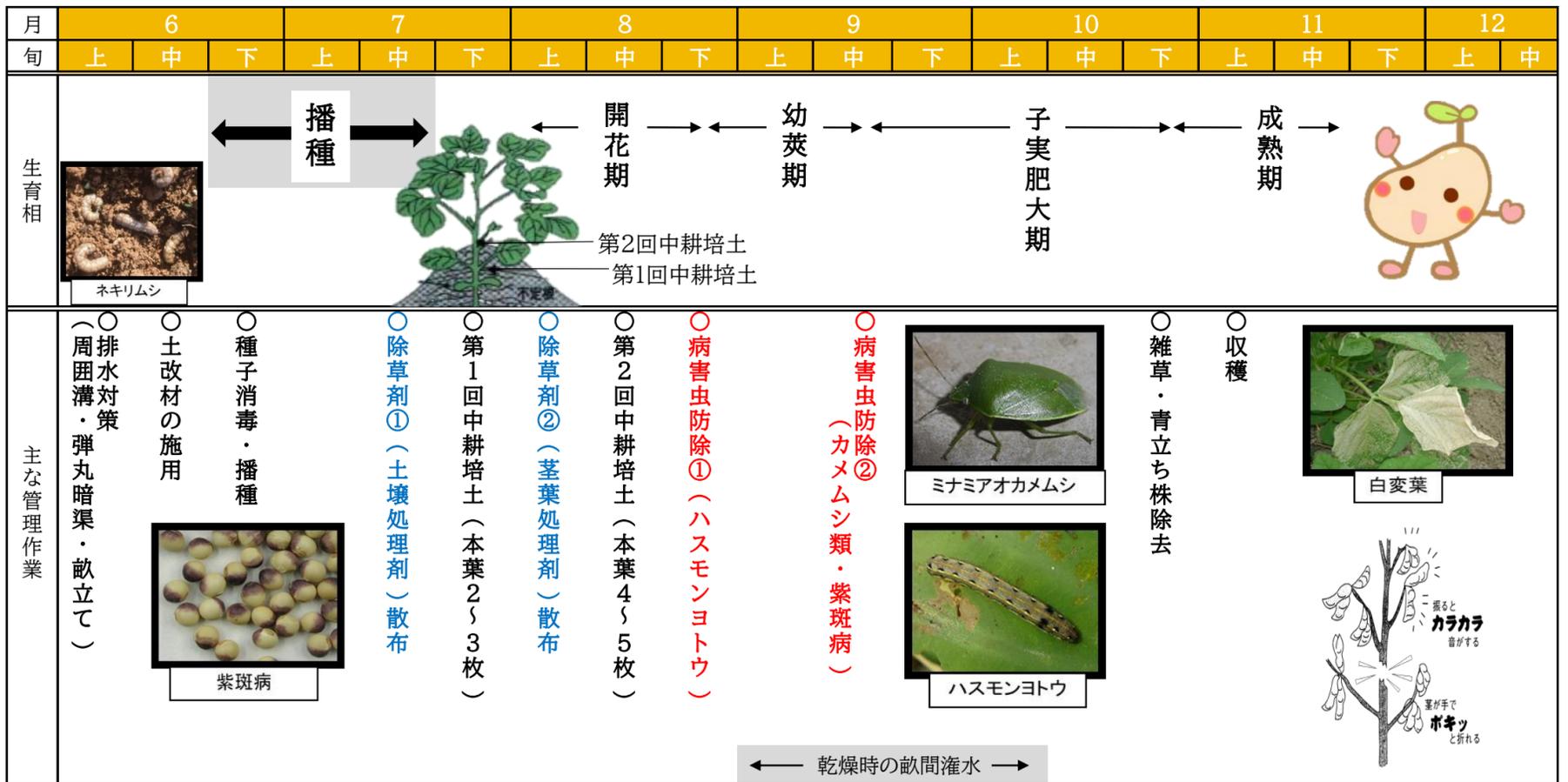


令和6年産大豆栽培暦



ちくしB5号栽培のポイント

- フクユタカより早播可能
- ①6月下旬から播種が可能
- ②播種適期は7月20日まで
- ③時期に合わせた播種量設定

目標反収200kg/根粒菌の活用

- 根粒菌の活性化のために
- ①土壌の乾燥に注意
- ②排水対策による酸素不足の防止
- ③適正pHを保つ (6.0~6.5)

■ほ場の選定と土づくり

- ①排水良好な水田を選び、大豆ほ場の集団化をはかる。
- ②地力増強のため、堆きゅう肥(0.5~1t/10a)を施用する。

■排水対策

→排水不良田では生育不良となるので、地下排水(本暗きよ、弾丸暗きよ)と地表排水(周囲溝、畝立て)を組み合わせ排水対策を行う。

■土壌改良材と肥料(10a当り)

使用資材名	施用量
粒状ミネラルG	160~200kg
粒状苦土石灰	100~120kg
ベスト444	15kg

- ①麦ワラをすき込んだ場合は、窒素成分を1kg程度増やす。(ベスト444で約0.5kg、連作ほ場では使用推奨。)
- ②土壌診断の結果によって、石灰資材の投入量を調整する。

■栽培様式(播種深度は3cmが基準)

栽培型	播種時期	播種量	条間	株間
早播	6月20~30日	3.0kg	70cm	30cm
適期播	7月1~10日	3.0~4.5kg		30~20cm
遅播	7月11~20日	4.5~6.0kg		20~15cm
晩播の場合	7月21~7月末	6.5~8.0kg		14~11cm
(狭畦密植)		6.5~8.0kg	35~40cm	20cm

- ①梅雨時期は湿害対策で浅播きを、梅雨明け後は乾燥対策で深播き(5~6cm)する。
- ②降雨等で出芽不良が著しい場合は、早めに播き直しを行う。
- ③地力の高いほ場は早播きすると倒伏しやすいので、連作や湿害の出やすいほ場から播種する。(ただし、7月末まで)

■種子消毒

薬剤名	使用量(種子1kgに対して)	対象病害虫
キヒゲン	10g粉衣	紫斑病・ハト他
キヒゲンR-2フロアブル	20mL塗沫	紫斑病他
クルーザーMAXX	8mL塗沫	紫斑病・ネキリムシ類・ハト他

①クルーザーMAXXは湿潤条件でも有効だが、乾燥条件下では発芽率が低下するので注意。

■除草剤

○播種前

除草剤名	10a当たり使用量	希釈水量	使用時期
ラウンドアップ マックスロード	200~500ml	50~100ℓ	耕起前~出芽前

○土壌処理剤...播種後に発生する雑草を抑える

	除草剤名	10a当たり使用量	希釈水量	使用時期
粒剤	ラクサー粒剤	4~8kg	-	播種後~出芽前
	サターンパアロ粒剤	4~6kg	-	
乳剤	ラクサー乳剤	400~800ml	100ℓ	
	サターンパアロ乳剤	600~1000ml	70~100ℓ	
水和剤	フルミオWDG	5~10g	100ℓ	

①フルミオWDGは、広葉雑草用なので、ラクサー乳剤等と混用する。

○茎葉処理剤...生育中に発生している雑草を枯らす

	除草剤名	10a当たり使用量	希釈水量	使用時期
混用可能	大豆バサラン液剤 (ナトリウム塩)	100~150ml	100ℓ	広葉雑草発生初期~2葉期 (大豆出芽直前~3葉期)
	アタックショット乳剤	30~50ml	100ℓ	広葉雑草生育期 (大豆2葉期~開花前) 収穫45日前まで
	ポルトフロアブル	200~300ml	50~100ℓ	イネ科雑草3~10葉期 (収穫30日前まで)

②アタックショット乳剤・パワーガイザー液剤はかかった大豆の葉に褐変・黄化等の症状がみられることがありますが、その後の生育に影響はほとんどありません。

■病害虫防除(10a当り)

	農薬名	使用量・倍率	液量	ハスモンヨトウ	カメムシ類	紫斑病	使用時期(収穫前)	回数
粉剤	トレボン粉剤DL	4kg	-	○	○		14日前まで	2回
	アルバリン粉剤DL	3kg			◎		7日前まで	2回
	スミトップM粉剤	3~4kg			○	○	21日前まで	4回
液剤	プレバソフロアブル5	4,000倍	100~300L	◎			7日前まで	2回
	トレボンEW	1,000倍		○	○		14日前まで	2回
	アルバリン顆粒水溶剤	2,000倍			◎		7日前まで	2回
	トップジンM水和剤	700~1,500倍				○	14日前まで	4回

①マメシクイガが出たほ場はプレバソフロアブル5を使用する。(ハスモンヨトウの防除時期)

■収穫

- ①大部分の葉が落ち、莢が褐変し、振れば「カラカラ」音がするか、茎が手でポキッと折れたら収穫(子実水分20%以下)。
- ②青立株や大型雑草は汚損粒の原因となるので、刈取前に抜き取る。